

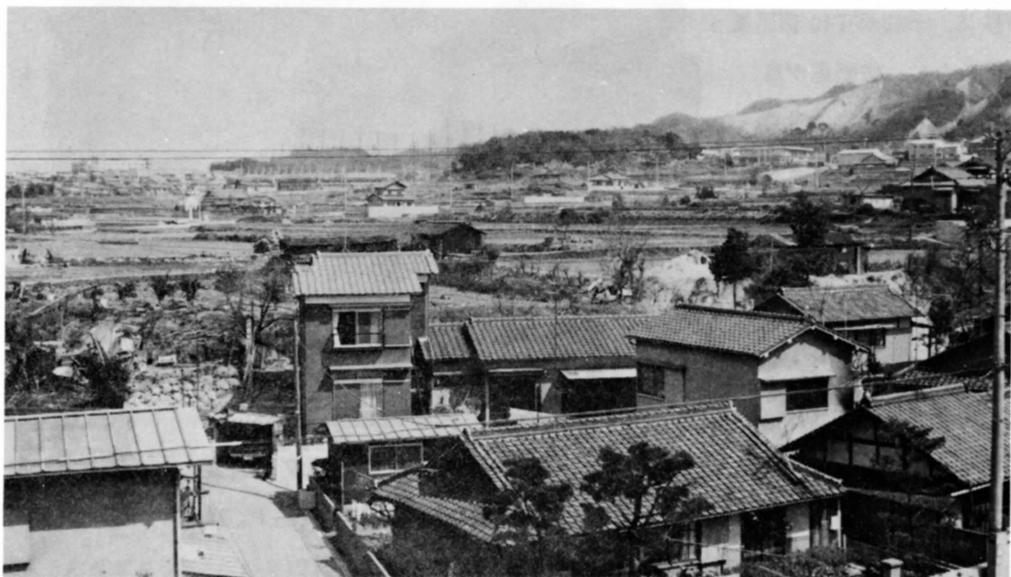
5. 「四條畷の古代史発掘」四條畷市教育委員会 1976年
6. 「讚良川遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会 1975年
7. 忍ヶ岡古墳（四條畷市文化財シリーズ2）四條畷市教育委員会 1974年
8. 「岡山南遺跡発掘調査概要・1」 四條畷市教育委員会 1976年
9. 平尾兵吾「北河内史蹟史話」（大阪府北河内郡教育会刊） 1931年
10. 江谷 寛「河内・正法寺跡の研究」古代学第12巻、第2・3合併号
11. 「四條畷町・正法寺跡発掘調査概報」大阪府教育委員会 1970年
12. 註 11
13. 山本 博「井戸の研究」綜芸舎 1970年

論考 清滝の古寺正法寺と氏寺の造営

瀬川芳則

その昔、清滝川の右岸にそって、山越えの古道清滝街道が、さかんに利用された。今は左岸の国道163号線が、大和への交通の幹線道路である。

江戸時代には、この清流にたくさんの水車場が並び、大阪の道修町（ドショウマチ）へ収めるための薬種をひく作業をした。昭和28年の洪水で、水車場も消えたままになってしまったが、ついこのあいだまで、コットン・コットンと回り続ける水車の姿が見られたわけである。



そして、この川沿いに古代寺院正法寺の優美な、またある時には雄大な伽藍が建ち並んでいた。

1. 清滝の古寺を訪ねて

四條畷市清滝字正法寺の地名どおり、清滝に正法寺と呼ばれる寺院があった。

そこは生駒山地から派生する小さな丘陵の上で、海拔約30メートル。それほど高い地形とはいえないが、寺跡付近に立つと、遠く六甲山地までも眺望がひらける見晴しのよい地形であることがよくわかる。

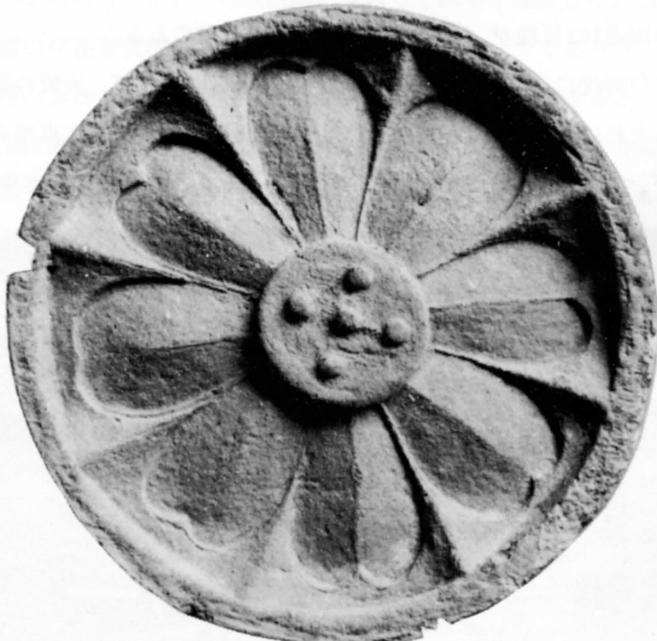
思えば、このあたりの水田からは、よく古瓦が拾われていた。布目(ヌノメ)のついた平瓦などなら、ちょっと注意していると足もとにころがっていたものである。

したがって、古瓦マニアもたびたび出没したらしい。地元の畷古文化研究保存会の有志たちが、この寺の瓦資料のほとんどは、熱心なというか偏執的というか、とにかく彼等マニアによって持ち去られたとこぼしていた。

字正法寺にのこる「堂の前」・「堂の庭」の地名も、それがどの時代にかかわるのであるのかは不明であっても、やはり重要な正法寺の伝承となっている。

ところで、現在の正法寺は中野にあって、
浄土宗の寺院であるが
元和8(西暦1622)年に
僧円明が清滝の地から
移し、それから40年ほ
どのちに、僧堅恵が真
言宗から浄土宗に改め
た(転宗)ものである。

したがって、現在の
正法寺に伝わる記録は
正法寺の長い歴史を考
えてゆくうえで、おお
いに参考にしなければ
ならない。



小倉家所蔵の蓮華文軒丸瓦

また、昭和44年度と昭和50年度には、待望の発掘調査が実施せられ、当寺の規模やその伽藍についての考証が一步前進したのであった。

清滌で小倉昇三氏宅を訪ね、夫人から見事な蓮華文(レンゲモン)の軒丸瓦を前にしながら寢屋川高等女学校長として、また考古学者として高名であった故平尾兵吾先生と正法寺との出会いの模様などの話をうかがっていると、この古い寺に対する土地の人々の想いが、痛いほどに感じられた。

以下にこの寺に関して、思いつくままに紹介と雑感・雑考をめぐらせてみたい。

2. 小野山正法寺と行基49院

中野の正法寺に伝わる記録（正法寺縁起）等によると、正法寺は、天平11（西暦739）年に有名な行基（ギョウキ）の開基した聖武天皇の勅願寺で、行基49院のひとつであった。また七堂伽藍のそなわる大寺で、小野山正法寺と号したという。

行基といえば、「近頃、小僧行基とその弟子がちまたにあふれ、みだりに幸・不幸を説き、同志を集めては指やヒジを切ったり焼いたりして苦行といい、戸別訪問しては食餌以外の寄付を要求し、悟りを開いたなどと詐称して百姓を惑わせ」すると、特に名指しで違法行為を指摘された時期（養老元年、西暦717年 続日本紀）もあったが、長屋王事件（西暦729）のあと藤原氏から光明子が、皇族以外の女性としては、はじめて皇后になると、行基らの民衆救済的な布教活動に対する政府の見解が急速に変る。

そして、小僧と呼ばれ、危険な活動家と見なされていた行基は、行基法師と呼ばれるようになり、ついには僧正以下のすべての僧官の上にたつ大僧正の地位を得るにいたる。

時あたかも政局は混迷し、聖武天皇は精神的にも疲れきっていたのであろうか、山背国相楽郡の恭仁（クニ）宮、近江国甲賀郡の紫香楽（シガラキ）宮、そして行基を大僧正に任命する前年の天平16（西暦744）年には難波宮へと、数年の間に転々と遷都をくり返しているのである。

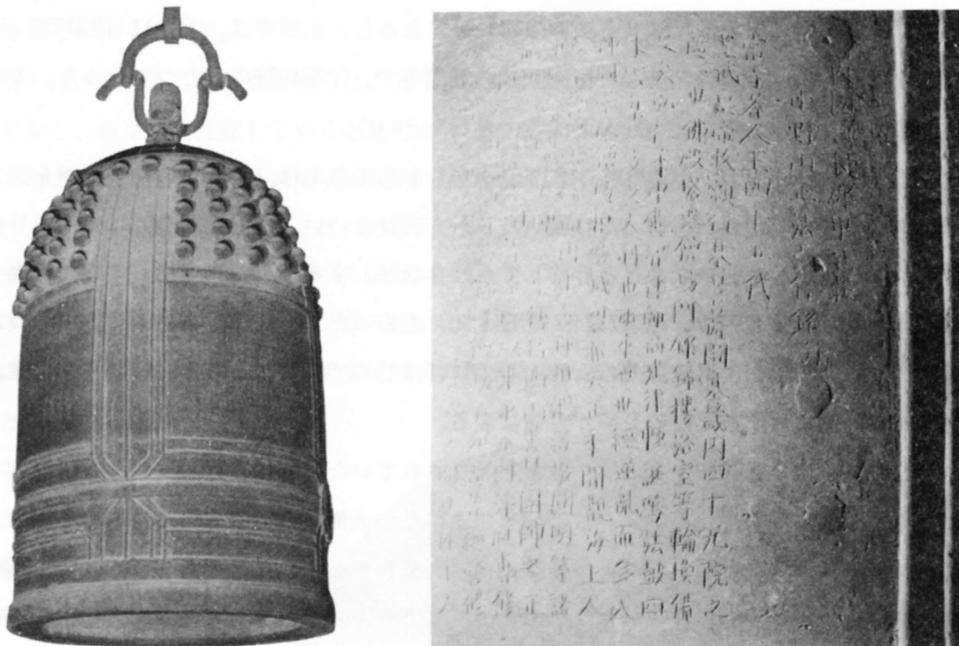
政権の担当者は、橘諸兄（タチバナノモロエ）で、政策ブレーンの中心をなしていた者に僧玄昉（ゲンボウ）がいる。そして、国ごとに僧寺（国分寺）と尼寺（国分尼寺）を建てよだの、東大寺（総国分寺）を建立するのだなどの詔（ミコトノリ）が、相ついでだされるのであった。

いかにきらびやかな天平寺院が諸国にその甍（イラカ）を輝かせ、また東大寺の大仏の巨軀が完成したにしても、庶民にとっては、まさに無策で無責任な政権であったことであろう。遷都と造寺のさわぎのため、「用度の費すところ、あげて計（カゾ）う」（続日本紀）こともできないほどで、そのために「いまや天下は憂（ウレ）え苦しみ、居宅すら定まらない」（続日本紀）ありさまである。

そしてこの遷都さわぎの終止符は、平城京の薬師寺に集めた大安寺・元興寺・興福寺など

の僧たちの意見によってうたれ、天平17年、再び平城京へ天皇たちが帰ってきた。

このような時代の様子を考えていくと、その中で行基の果したであろう役割を、ついには権力の中にくみこまれていった彼と、そして反権力的な行動によって、畿内の民衆に大きな影響力をもっていた彼を、大僧正などという破格の待遇で迎え入れざるをえなかった政府とを考えあわせるならば、清滝街道ぞいの古寺が、何らかの形で、行基とのかかわりをもつことは、じゅうぶんに考えうることであろう。



ただし、正法寺が行基49院のひとつであるという寺伝については、この寺が行基の開基だとしているのと同類の、きわめて信ずるにたりないものである。

行基は、30才代の後半から、天平21年に80才で死亡するまでの間に、49の寺院を造っている（続日本紀）。彼の一生は、実に多彩多忙をきわめていたようである。行基菩薩のことばがあるとおり、行基に対する信仰が、49院の分布する京畿内に盛んであったと思われる。

ところで、河内には行基建立の寺院、すなわち49院に含まれるもののが6寺院あるが、それらは、河内郡・交野郡・丹比郡（タジヒグン）・茨田郡に属しており、清滝の属する讚良郡の名はでてこない。交野郡・茨田郡で行基年譜に述べられている寺院は、次の三カ所である。

交野郡一条の久修園院	神龜2年
茨田郡伊香の救方院	天平5年
茨田郡伊香の薦田尼院	天平5年

しかし、今日多数の古寺が、行基を開基とする伝承をもっており、そこに行基菩薩崇拝のみなみならぬものであったことがうかがい知られるのである。

以上は、行基云々について述べたので、次に小野山正法寺の山号について少しだけ参考意見を述べておこう。

日本書紀の欽明天皇23年秋七月の条に、河内国の更荒(サララ)郡の鷺鷦野邑(ウノノサト)の記事がある。そういえば、持統天皇の幼名も鷺野讚良(ウノノサララ)の皇女であった。

おそらくは、オノもウノも同じア行の音であり、ウ野の里に山号のオ野も端を発しているものであろう。

そして、当地がウ野といわれたのは、河内平野が低湿な潮状をなしていたと思われる当時、水鳥が多く棲息していた付近の景観によるものであろうか。

なお、さきに引用した日本書紀の記事では、新羅よりの使者が帰国せずに住み着き、その子孫が今は河内の国(更荒郡)ウノノサトの新羅の人ということになっている。

また、新撰姓氏録の未定雜姓の項に宇努連(ウノノムラジ)の名があり、河内国に住み新羅の皇子であった金庭興の後裔(コウエイ)と記されている。

したがって、新羅系の渡来者たちによって、当地にいち早く古代寺院の建立がなされたものであったかも知れないである。そしてこのウ野の地にちなみ、宇努連の氏姓をもつにいたったとも考えられよう。

このほか、当地方に関係を深くしたと思われる渡来系の氏族には、百濟系と伝える宇努造や、甲可(鹿深)氏があるが、註釈欄に別記したので、参考としていただきたい。

3. 清滝寺と役行者(エンノギョウジャ)

長尾の正俊寺は、領主久貝因幡守正俊の名を寺につけたことからもわかるように久貝家の菩提寺として建立された禅宗寺院である。

正俊の子正世が、亡父と一族のために、讃良山清滝寺中野坊(正世公墓碑の銘文)もしくは、讃良山中坊清滝寺(正俊寺縁起)を慶安2(西暦1649)年長尾に移して建てたものである。

清滝寺中野坊と中坊清滝寺とでは、微妙なくいちがいを感じはするが、平安時代に、東高野街道と清滝街道とにのぞむ地の利を得て、おおいに発展をした真言寺院小野山正法寺が、付近の山麓にいくつかの坊をもつにいたったことも考えられるであろう。

いずれにせよ、現在正俊寺には、本尊として黒仏(クロボトケ)で知られる釈迦如来座像一体と、府指定文化財となっている立派な十三重の石塔があり、いずれも清滝寺から運びこんできたものである。

正法寺の全体をさしているのか、あるいはその一坊をいうものであるのかは別にして、清滝寺の寺号とともに、正俊寺の資料（縁起及び、墓碑銘）は、清滝寺の開基を修驗道の師祖といわれる役小角（エンノオズヌ）すなわち役行者にあてている。

これこそどこへ行っても言い伝えられる役行者開基の伝承である。役小角についての細事は不明な点が多いが、7世紀から8世紀にかけて、大和の葛城山中で修行をつんだ呪術者として知られている。

真言宗・天台宗が共に密教を伝える過程で、呪術的・山岳信仰的な要素を深め、山岳にあって苦行をつみ、そこから呪驗力をつけるとする験者（ゲンザ）が現われると、各地にその靈山が生まれ、彼等はいずれも役行者を大先達として崇拝するようになる。

中世末になると、金峯山・大峯山・熊野山は靈山中の靈山として、そこで登拝修行をめざす行為が民間にまでも流行した。特に熊野山については、アリの熊野詣でのことばどうり盛況をきわめたのである。



国中神社境内の石棺蓋石

凝灰岩の家形石棺で付近の古墳からの発見である



正俊寺 十三重の石塔

清滝といい清滝川といい、また山岳を背後にする真言寺院正法寺といい、役小角との結びつけにふさわしい条件はそろっている。したがって、この種の民間信仰に当寺が背を向けることは、到底考えられないことであろう。

中野の正法寺の記録にある行基開基にせよ、この役小角開基にせよ、いずれも古い法燈を誇る当寺の縁起を、それぞれの時代の宗教界の動静すなわち信仰需要を、敏感にとらえた知恵者の策したところであろう。そして、時代の流れを適確にとらえることができてはじめて、本来

は伝統的で保守性をもつ古い寺院が、廃絶してしまうことなく、長時間の維持を可能にするのである。

4. 清滝正法寺の創建の時期

すでに述べてきたことからもわかるように、この寺の創建の時期を、行基や役行者に結びつけて論することはできない。同様に、女帝持統の幼名であるところの、ウノの讚良に関連を求めて当寺の創始を求める事にも、さしたる根拠があるようには思えない。

すなわち、清滝字正法寺で発見している古瓦のうちで、最も古式の形式をもつものは、行基・役小角・ウノの讚良皇女らの活動期よりも、古瓦の形式からいと、一時期さらにさかのぼる古式の蓮華文をあらわす軒丸瓦で、小倉昇三氏所蔵のものがその典型である。

古瓦研究者が、八葉素弁蓮華文（ハチヨウソベンレンゲモン）とよぶであろうこの種の軒丸瓦は、通常百濟系といわれるもので、類品を百濟の故地「扶余」とその付近に見ることができるものである。

過日、この瓦について幾人かの研究家の見解を聞く機会を得たが、多くの人が飛鳥時代の末頃といっていた。

飛鳥時代と次の白鳳時代を、どのあたりで区分するのかは、容易にはいいがたいのであるが、大化の革新（西暦645）を目度にしていることが多い。

字正法寺では、八葉素弁のこの種の軒丸瓦は、最近の大坂府・四條畷市の調査の際にもいくつか出土して、もはやこの瓦の時期に、当寺創建のおこなわれたことが動かしがたい事実と見なされるにいたっている。

ただし、この瓦をもって、古式の蓮華文であり、また何の飾りもない外縁（周縁）の幅の薄いことなどのみによって、飛鳥時代にあてることには問題があるようである。

すなわち、藤沢一夫氏が指摘（河内清滝寺法名正法寺考）しておられるように、「花弁は弁端切込形式に属し、間弁の頭部が両方に挺出して、弁頭を包含するようになって」おり、また「花弁の部分が第一段、花弁を包む間弁の部分が第2段、その外側に一般的に認められる溝状部分がなくて、外縁が第3段となり、弁区から外縁までが階段状をなしている。」「それは百濟故地でも、日本でも第一期式の新しい時期に属している」もので、この古瓦の編年上使用されている第一期式をもって、ただちに飛鳥時代とすることが、論議を複雑にさせてしまった原因のように思える。

そこで、創建当時の時期を、こうした古瓦研究の成果にたって考えるならば、蘇我入鹿（ソガノイルカ）による斑鳩寺焼失事件（皇極天皇2年、西暦642年）の頃から、再び斑鳩寺の焼失する天智天皇9（西暦670）年の頃までの間に、あてておきたいのである。

この寺の創建は、いずれかの氏族の氏寺としてである。従来は、その財力を傾けて古墳の造営にあたったであろうところの地方の有力者は、この頃になると、氏神に並べて氏寺の建立をおこなうようになった。

そしてこの氏寺の各地建立の実態は、続日本紀の天平元年の条に「河内國の寺六六区」と記されているように、河内一国だけで66ヶ寺の多きを数えるほどであったのである。

北河内地方では、正法寺のほかに、次の寺院跡が古代寺院として、河内66ヶ寺に含まれていたものと思われる。

讚良廃寺	四條畷市	高宮廃寺	寝屋川市
太秦廃寺	寝屋川市	長宝寺	交野市
開元寺	交野市	中山寺	枚方市
百濟寺	枚方市	蹉跎廃寺	枚方市
船橋廃寺	枚方市	九頭神廃寺	枚方市
楠葉廃寺	枚方市	西山廃寺	八幡町

なお、これらの一応の確認がなされている寺跡のうちで、第一期式の古瓦を伴っているのは、正法寺跡のほかに、楠葉廃寺・高宮廃寺のみで、これら三寺院の中では、楠葉廃寺から最も古式の軒丸瓦が発見せられている。

5. 伽藍の造営と正法寺

寺を建てるというが、これは大変な難事業である。

たとえば、瓦だけについて計算してみても、七堂伽藍のすべてに使用する数量は實に莫大である。正法寺の場合でも、金堂や講堂には、それぞれ数万枚の瓦が必要であるから、全部合せれば、少くとも数十万枚の数になることであろう。

これだけの瓦は、重量にして約数百トンになるから、それこそ原料の粘土だけでもどれほど用意しなくてはならないだろうか。

瓦を焼く窯は、ひとつの窯で400枚も焼ければ大成功である。一昼夜ぶつ通しで燃し続けて出来上るわけであるが、かりに50万枚の瓦を焼き上げるとすると、延べにして1500窯が必要であるから、同時に10基の窯を使用するにしても、150回の焼成ということになるから燃料の薪だけでもぼう大なものである。

正倉院文書を見ると、瓦関係の工人として、生瓦作工・瓦焼工・瓦葺工・瓦窯作工の名があり、これを総称して瓦工とよんでいる。

延喜式（エンギシキ）によると、生瓦を作る工人の一日の製作能力は、女瓦・男瓦の場合で90枚、宇瓦なら28枚、鎧瓦で23枚となっているから、正法寺の場合、生瓦を作成するだけ

で延べ6000人以上の、あるいは1万人近くの人数を要するわけである。

これに、瓦焼工・瓦葺工・瓦窯作工の員数を加えれば、瓦関係だけの工人の延べ必要数が計算できる。

しかし、瓦工だけで寺院が建設できるものではない。

仏像を作るための仏師はもちろんのこと、たくさんの材木を伐り、加工して建物を建てなくてはならない。しかし、ひとつの主要な建物の屋根に、5万枚の瓦が葺かれるとすれば、それだけでも重量は100トン近くになり、瓦の下にひく粘土の重さを加えると、実に150トンにもなることであろう。

したがって、直径数十センチもの巨大な柱を作らなくてはならず、これらのすべての重量を支えてなお傾くことがないように、大きな礎石と、地盤をつき固める基礎工事がいることになる。

すなわち、造寺工事とは、まさに大工事であって、着工から伽藍の完成にいたるまでには、おそらく延々と数次にわたる10年以上もの時間と、莫大な経費がついやされたのである。

正法寺の伽藍は、両塔式の形式に復原されているが、これは奈良薬師寺に典型的な白鳳時代に流行した伽藍のスタイルであると思われる。

おそらくは、創建期・藤原宮期・平城宮期ぐらいまでをかけて、ようやく奈良時代前期には、美しい両塔式の伽藍が完成したことであろう。

なお、正法寺を清滝の地に氏寺として創建した氏族としては、すでに「清滝正法寺の創建」の項でふれておいたように、新羅系もしくは百濟系と考えられる宇努氏をあてることがもつともふさわしく思える。

また、字正法寺よりやや上流に祭られる国中神社は、延喜式神名帳にも記されている古い神社で、正法寺を氏寺とした氏族の氏神であったことであろう。それが大蛇宮などとよばれることのあるのは、南約1.5Kの山間に建つ龍尾寺や、大東市の龍間寺、讃良川の水源をなす龍王池などと共通する龍神信仰によるものと思われるが、国中神社のみが龍でなく大蛇をしている点に、より古い信仰形態を見出したい。

6. 清滝の正法寺の終末

清滝にあった正法寺が、平安時代に入り、真言密教に転宗したのが、厳密にいっていつごろの出来事であったのかは明らかではないが、東高野街道の要地にあって、比較的早い時期に真言寺院の仲間入りをしたにちがいなかろう。

中野正法寺の鐘銘にも平安初期弘仁の頃の様子を「大刹」としているが、その広大な伽藍は、真言寺院にふさわしく、山岳の自然地形を利用しながら、いくつもの堂塔をふやしたこ

とであろう。

そして、長尾正俊寺の黒仏や石造十三重の塔の作られた中世に入っても、相当大規模なかつ縁起の古い寺として、存続していたことと思われる。

この寺が、衰えはじめるのは、建武新政の前後の戦乱に被災してからのことである。周知のとおり、当方は楠公ゆかりの土地柄としての伝承が多く、正法寺も含めて、特に山岳もしくは山麓の寺院は、いずれも軍事的な性格が濃厚であったことであろう。

正俊寺及び、中野正法寺の記録類から、正法寺の罹災記録は次の通りである。

元弘・建武・延元の乱——1330年代

慶長・元和の役——1600年前後

そして、途中天文年間及び、天正年間に観海上人によって再建されたらしいが、真言宗自体の衰退もあり、遂に中野の地に移転し、その後浄土宗に転宗して今日にいたっている。

なお、発掘調査にともなって、多くの中世遺物が発見されている。これら記録伝承の真偽に関しても、今後の地下埋蔵構造や遺物がおのずから明らかにすることであろう。

註

・僧尼

この時代の僧たちは、僧尼令の規定にしたがうように規定されており、布教の行為はかたく禁止せられていた。その意味では、僧侶というよりも、僧官的性格がつよい。

・行基年譜

安元4（西暦1178）年にできたもので、行基の49院を述べている。しかし、行基の死後すでに430年もの歳月をすぎており、これをもって絶対視するわけにはいかない。

行基年譜に記載するところによると、49院の国別分布数は、摂津15・和泉12・山城9・河内6・大和6・京1である。

・正法寺縁起

聖武の頃、行基開基。

・正法寺鐘銘

聖武勅願、行基開基。

・神楽良（サララ）の小野

万葉集卷の第16に、「おそろしき物の歌」として「天なるや 神楽良の小野に 茅草（チガヤ）刈り 草刈りばかに 鶴を立つも」の歌があり、この小野と、正法寺の山号の小野山の関係を考える見解もある（藤沢一夫「河内国清滝寺法名正法寺考」）。

・宇努造（ウノノミヤツコ）

新撰姓氏録の河内国諸蕃の項に、宇努造の名があり、百濟の國の人弥那の子富意弥の後裔としている。また平安時代中頃に著わされた倭名類聚抄（ワミヨウルイ ジュウショウ）には、当地方の郷名が甲可となっている。日本書紀の敏達天皇の条に、百濟から来朝した鹿深の臣が、弥勒（ミロク）の石像一体を持っていたことを記しているが、鹿深は近江国甲賀郡の豪族として、その後裔は代々甲賀郡の郡司級の地位をえていたらしい。

すなわち、鹿深・甲可・甲賀は、その文字を異にしてはいるものの、深くかかわるものと思われる。

・瓦の名称

大棟の上で両端を飾るのが鷗尾（シビ）瓦や鬼瓦である。

平瓦を女瓦とよび、筒瓦を男瓦とよぶことが多い。

軒先の部分には、時代によって異なるいろいろな文様がつけられるが、平瓦の軒先にあるものを宇瓦（ノキガワラ）もじくは軒平瓦、筒瓦で軒先にあるものを鎧瓦（アブミガワラ）とか軒丸瓦とよぶ。

・堤瓦（ツツミガワラ）

棟の部分をつくるために、平瓦をタテに半分に切ったもので、これを積みあげて棟にする。

・瓦工たちの日当（正倉院文書）……この頃米1升5～6文

生瓦作工	10 文
瓦葺工	10 文～11 文
瓦焼工	12 文～15 文
木工	10 文～16 文
木工	10 文～17 文
画工	35 文～36 文
仏工	60 文

（大川 清「かわらの美」より）

・当時の物価（当時の1升は現在の約4合）

711年	米6升が1文
751年	米6升が30文
762年	米6升が42文
764年	米6升が60文
765年	米6升が120文